

# 昆布で見る江戸時代— 2年間にわたって昆布を追求した子どもたち—

千葉県千葉市立草野小学校 三橋 昌平

## 1. 実施学年および教科・領域

小学校第6学年 社会科・総合的な学習の時間

## 2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

(1) 主題名 昆布で見る江戸時代

(2) ねらい

### ①学習指導要領との関連

本単元は学習指導要領の内容(1)のオ「キリスト教の伝来、織田・豊臣の天下統一、江戸幕府の始まり、参勤交代、鎖国について調べ、戦国の世が統一され、身分制度が確立し武士による政治が安定したことがわかること」に相当する。昆布という「もの」から鎖国の中でも外国との交流があったことをつかむとともに、江戸時代の流通や人々の交流について理解することをねらいとする。また、資料を活用して自分の考えを形成していくことで歴史に対する興味・関心を高める。

### ②昆布と食文化

沖縄に行くと昆布料理が多い。豚肉・鶏肉・昆布を入れた汁物のイラブー料理、豚肉・切り昆布・こんにゃくをいため蒸したクープイリチー料理、昆布巻きのクープマチ、豚足・昆布・大根を煮たアシティビチなどの昆布料理がたくさんある。さぞかし沖縄では昆布がとれるのだろうと思っていたが、実は沖縄で昆布はとれない。なぜ昆布のとれない沖縄で消費量が日本一だったのか調べてみると、昆布ロードというものの存在に当たった。江戸時代、財政危機に陥っていた薩摩藩が密貿易による藩政の立て直しを画策していたが、ほぼ属国であった琉球を介して清と貿易し、当時は貴重であった漢方の材料を大量に輸入することで大きな利益を得た。清への輸出品として求められたのが昆布である。産地である北海道から北前船によって大阪に運ばれ、その後薩摩、琉球そして清へという昆布の流通経路、これが「昆布ロード」である。これは5年生で沖縄を学習するときの題材としておもしろいのではないかと考え、昆布ロードについて取り組んだ。6年生では昆布ロードを追求していく中で、5年生にはまだまだ理解が難しいと感じた部分であった歴史的な観点をさらに押し進めることをねらいとした。北前船に代表される江戸時代の流通や、人々の交流、近世東アジアの国々の関係性などである。

(3) 博物館との関連

#### 【活用した資料】

・第3展示室 「国際社会のなかの近世日本」のコーナー

4つの口を通じて近世日本の対外関係の広がりをつかむことをねらいとする。昆布や俵物といったものから当時の輸出入について具体的な物を見ることで理解

を深める。

・第3展示室 「ひとつのものながれ」のコーナー

北前船模型を中心に見学し、江戸時代の流通（航路や廻船組織）についてつかむ。

・琉球貿易図屏風

江戸時代の琉球・清・薩摩の関係（琉球の両属関係）を具体的な物の交易を通して理解する。

3. 指導計画（6年生）（14時間扱い）

過程	時間	○学習活動 ●学習内容	指導上の留意点
導入	1	○5年生の学習の振り返り ●5年生の学習を振り返り、印象に残っていることやもっと知りたいことについて話し合う。 ・ 昆布の密輸について。 ・ 当時の昆布の値段は。 ・ 昆布はどんな薬になったのか。	・ 5年生の学習でわかったこと、わからなかったことに分けて考えさせる。
展開 1	2	○資料を読み込む ●昆布ロードについて書いた大学生のレポートを読み、昆布ロードについての理解を深める。 ・ 富山のレポート・沖縄のレポート ●北前船についての文章を読み、江戸時代の流通についてつかむ。 ○国立歴史民俗博物館を見学する(希望者)。 ●北前船に代表される江戸時代の流通や人々の交流、近世東アジアの国々の関係性をつかむ。 ・ 北前船は誰の船。 ・ 中国と一番貿易が盛ん。	・ 資料を読みながら疑問を探すよう促す。  ・ 見学してわかったことや疑問に思ったことをメモに取るようにさせる。
展開 2	1	○資料を読み込む ●北前船の写真や文章から考えた疑問について話し合う。 ○ゲストティーチャーの授業①	・ 歴博に見学に行った子どもたちにわかったことを報告させ、学級で共有する。 ・ 疑問に思うことを質問する。
	2	●富山出身の保護者(祖父)の話を聞く。 ○手紙を書く	・ 聞きたいことをわかりやすく書くよ

展開 3	1	●資料を読み込んだり博物館を見学したりしたことで出た新たな疑問を手紙に書く。	う促す。 ・手紙は歴博や5年生のときに手紙を送った富山県の方、昆布屋を営む店主に送ることを伝える。
	2	○資料を読み込む ●手紙の回答から疑問について自分の考えをまとめる。	・自分の興味の観点をはっきりさせる。
	2	○ゲストティーチャーの授業② ●江戸時代の琉球・清・薩摩の関係について知る。 ・琉球が清と朝貢関係を結んでいる。 ・薩摩藩が琉球を間接支配している。 ・進貢船は何のためにあるのか。	・疑問に思うことを質問する。
まとめ	1	○レポートにまとめる。 ●これまで学習してきた中で興味を持った観点から昆布のとれない沖縄で、なぜ昆布の消費量が多いのかについてレポートにまとめる。 ・昆布ロード・薩摩藩の政策・北前船 ・越中売薬商人	・興味を持った観点を資料を使いながら書くよう声かけをする。
	2	○かるたづくり ●自分の興味を持った観点でかるたをつくる。 ・昆布ロード・薩摩藩の政策・北前船 ・越中売薬商人	・自分の興味を中心にテーマを決め、作るようにする。
発展	1	○お礼の手紙を書く ●疑問の手紙などを送った方へお礼の手紙を書く。	・自分が分かったことも含めて書くようにする。

#### 4. 実践の概要

##### (1) 5年生の学習のようすと子どもたちの取り組み

5年生の社会科「私たちの国土と環境」の単元で北海道と沖縄について学習した。北海道と沖縄をばらばらに学習するのではなく、つながりが昔からあったこと、南の玄関口である沖縄からアジアとの関係を考えることに取り組ませたいと考え、発展学習をおこなった。総合的な学習の時間を使うことにした。食材を題材にすることで子どもたちが興味をもって学習を進められるのではないかと考えた。

##### ① 指導計画（9時間扱い・1月～3月・総合的な学習の時間）

時間	主な学習活動
1・2	昆布の統計資料から学習問題を立て、沖縄で昆布の消費量が多い理由を資料から考え、話し合う。
3	昆布の生態について調べる。
4	疑問点や知りたいことを手紙にする。
5～7	手紙の回答から疑問点について考え、話し合う。
8	お礼の手紙を書く。
9	学習を振り返って感想を書く。

1時間目では、「昆布のとれない沖縄で、なぜ昆布の消費量が多いのだろう」、という学習問題をたてた。沖縄県で昆布の消費量が多い理由を考えた学習での感想に「沖縄の人で昆布を食べない人はいるのかな」(りょう、以下子どもの名前はすべて仮名)というものがあつた。那覇以外の離島はどうなのだろうということである。昆布は全て那覇を通して中国に送られたのであるから、沖縄の離島には昆布はおろされなかったのではないか、もしそうであれば今も昆布を食する文化はないのではないかと考えた。そこで沖縄の離島や昆布の消費量の多い地域に手紙を送ってそこから疑問を解決していった。

## ② 5年生の学習を終えて

- ・疑問を手紙にして、昆布の歴史などがわかって良かった。これからも昆布のことやいろいろな歴史のことをもっと知りたいなと思った。(あやの)
- ・昆布が北海道から沖縄県へ広がっていったのがビックリした。(みほ)
- ・昆布が北海道を出発して大阪を経由した後、琉球から中国へ輸出されていたことを初めて知った。(ゆうき)
- ・驚いたのは薩摩藩についてです。薩摩藩は多くの借金があつて偽金をつくったりしたみたいでとても信じられませんでした。(きょうせい)

多くの子が手紙を送って回答がきたことに喜びを感じていた。インターネットや文献にあたって情報を得ることは大切である。情報の取捨選択など身につけさせたい力だ。そこでさらに調べてもよくわからないことを手紙やメールで専門家に聞くことで、子どもたちは理解を深めるとともに、意欲的に取り組むことができ、とても効果的だと感じた。子どもたちは聞き方についてもよく考えるようになるし、相手や手紙を送った地域に愛着ももてる。

昆布の流通経路に興味をもった子どもも多くいたが、江戸時代のものの流れや交通については曖昧な理解にとどまっていた。しかしそれでも5年生の段階では興味をもったことが大きな収穫だと考えた。6年生で始まる歴史の学習に対する子どもたちの活動に期待がもてた。

## (2) 6年生の学習のようすと子どもたちの取り組み

6年生では5年生での学習をさらに押し進めることができると考えた。5年生の時にはまだまだ理解が難しいと感じた点は歴史的な観点である。北前船に代表され

る江戸時代の流通や、人々の交流、近世東アジアの国々の関係性など興味深いものがたくさんある。昆布を題材にこれらのことについて十分学習できると考え、引き続き取り組むことにした。社会科と総合的な学習の時間を使った。

6年生の学習の初めに、5年生の学習を思い出して印象に残っていることやもっと知りたいことを話し合った。5年生のときの理解がどれくらいか確認するとともに、6年生で歴史を学習したことで新たな興味も出てくるだろうと考えたからである。疑問として出てきたのは以下のようなものである。

- ・ 昆布の値段はいくらか。(ゆうや、みき、ゆうき)
- ・ 昔と比べ沖縄の若者があまり昆布を食べない理由は。(かえで)
- ・ 昆布は海のものなのに乾燥しているのはなぜか。(はるこ)
- ・ 沖縄と中国との関係はどのようなものなのか。(れいか)
- ・ 偽金づくりについて。(ゆうき)
- ・ 密輸について。(りくと)
- ・ 海外ではどこまで昆布が広がっているのか。(みつる)
- ・ 昆布はどんな薬になったのか。(かおり)

たくさん疑問は出たが、整理してみると、疑問は昆布そのものについて、昆布と関連した歴史的なことについて、昆布の世界事情の三つに分類できる。またその中でも5年生での理解が曖昧であるから出た疑問と、理解できたからさらに深く、広くという新たな疑問に分かれる。前者については資料を読み込んでいくことで解決していき、後者は手紙にしたり、博物館に行ったりすることで解決の糸口を見つけようと考えた。

#### ① 歴博見学 2011年1月30日

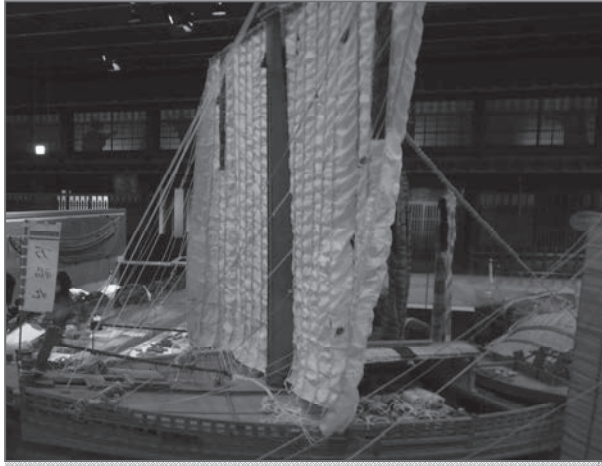
子ども8名(クラスの4分の1)と保護者が参加し、第3展示室の「国際社会の中の日本」と「ひととものながれ」の展示を見学した。昆布や北前船の模型、東アジアの地図などと自分のこれまで学習してきたことを結びつけながら、「これ知ってる～」などと言いながら興味深く見学していた。ここで見学しながら疑問を見つけることも重要と考えていたのでメモに書き留めながらわかったことや疑問を考えた。

#### 子どもたちのメモから

- ・ 中国が一番貿易が盛んだった。(輸出・輸入の展示物を見て)
- ・ どんな身分の人が乗っていたのかな。男女どちらも？誰の船？(北前船の模型を見て)
- ・ 中国から伝わった料理が多かった。東道盆という料理の中に昆布巻きがあった。(沖縄の料理の紹介を見て)
- ・ 物を買って他の所で売るということを繰り返す買い積み方式を中心に活躍。1回の航海は約8ヶ月。(北前船の説明を読んで)

歴博を見学していく中で、中国との関係が浮き彫りになってきた。また北前船に関連してわかったことや疑問がたくさん出ていた。これを教室に持ち帰り報告するとともに、見学に行った子どもたちには博物館の楽しさを味わわせることができた

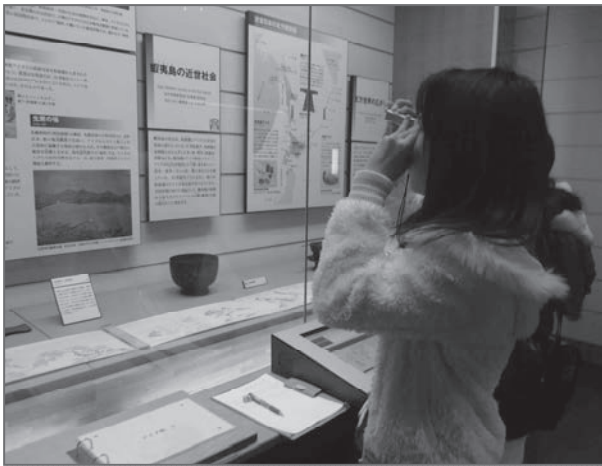
のではないかと思う。



北前船模型



資料を見てメモを取る子ども



単眼鏡を使って資料を見る子ども



昆布などの貿易品

## ②ゲストティーチャーの授業 2011年2月28日

歴博でも浮き彫りになってきた中国との関係であるが、日本（薩摩藩）・沖縄・中国の関係をうまく理解できず悩んだ。いろいろと考えた結果、元教員の平野さんに授業をお願いすることにした。ゲストティーチャーに来てもらうことで子どもたちにも大きな効果があると考えた。この授業では江戸時代の琉球と清、薩摩の関係（琉球の両属関係）を具体的な物の交易を通して理解することをねらいとして展開してもらった。

授業ではこの当時の三者の力関係を確認しながら、貿易について5年生の学習を振り返り、3国がどのような物をやり取り（貿易）していたのか整理していった。その後、子どもたちは「琉球貿易図屏風」の進貢船と薩摩船の部分の絵を見て疑問を出していった。疑問を整理しながら三者の関係に焦点が当たっていき、子どもたちの感想にもそれが表れてきた。

- ・ 沖縄が独特な感じがあるのは中国から認められて文化が似ているからかなと思った。昆布料理に豚肉が入っているのは中国の文化の影響かな。（りくと）
- ・ 進貢船には日本の国旗や中国語の旗、シーサーに似た旗などがあっていろいろな場所と関係があるんだなと思った。（はるこ）

- ・ 沖縄がもらった物を鹿児島の人たちが取るのはずるいと思った。(しょうた)
- ・ 中国は琉球を支配していたけれどアジアの中で他国ともそんな関係だったのか。(かおり)
- ・ 沖縄の王は本当にこれで良かったのだろうか(しゅんじ)

沖縄と当時の他の国々との関係に注目していることがわかる。沖縄が朝貢関係を結んでいることに関してそれでいいのかという疑問や、アジアの中での関係について興味が広がっている。その他の感想から三者の関係がつかめたことがわかる。一方で進貢船に注目した学習であったので、感想が進貢船に偏ってしまったこともあげられる。しかし、まとめでのレポートを見ると、ほとんどの子が近世の東アジアの国の関係性を理解した上で書くことができている。このことからこの授業で得たものは授業後の感想からは見えにくいですが、結果全体を振り返ると、江戸時代の琉球と清、薩摩の関係を理解する上でとても大きく、効果的であったことがわかる。

### ③まとめのレポート

2年間の学習のまとめとして、5年生の最初に設定した学習問題「昆布のとれない沖縄でなぜ消費量が多いのか」をレポートにまとめた。2年間で学習したことを、興味をもった観点から書いたことで、それぞれの視点が違うことがはっきりとした。そこには、子どもなりのこだわりが見て取れる。

昔、昆布は北前船により大阪や富山に運ばれてきた。そこで富山の売薬商人が薬を手に入れるため北前船から昆布を買い、琉球王国へと昆布を運んだ。琉球王国から昆布は中国へと輸出され、中国からは漢方薬としてかえってきた。中国から輸入された漢方薬は、富山の売薬商人の手に渡っていった。そのようなことがあり、琉球王国に昆布が伝わっていった。沖縄の昆布の歴史の資料によると、冷蔵庫のないとき南の島々の人にとって昆布は腐らない貴重な食料品だったという。祝儀の品としてもさかんにやりとりされるようになり、昆布そのものを食べる料理も工夫されていった。このようなことから、沖縄では昔から昆布が親しまれ、中国に昆布を輸出していたため…。(みなみ)

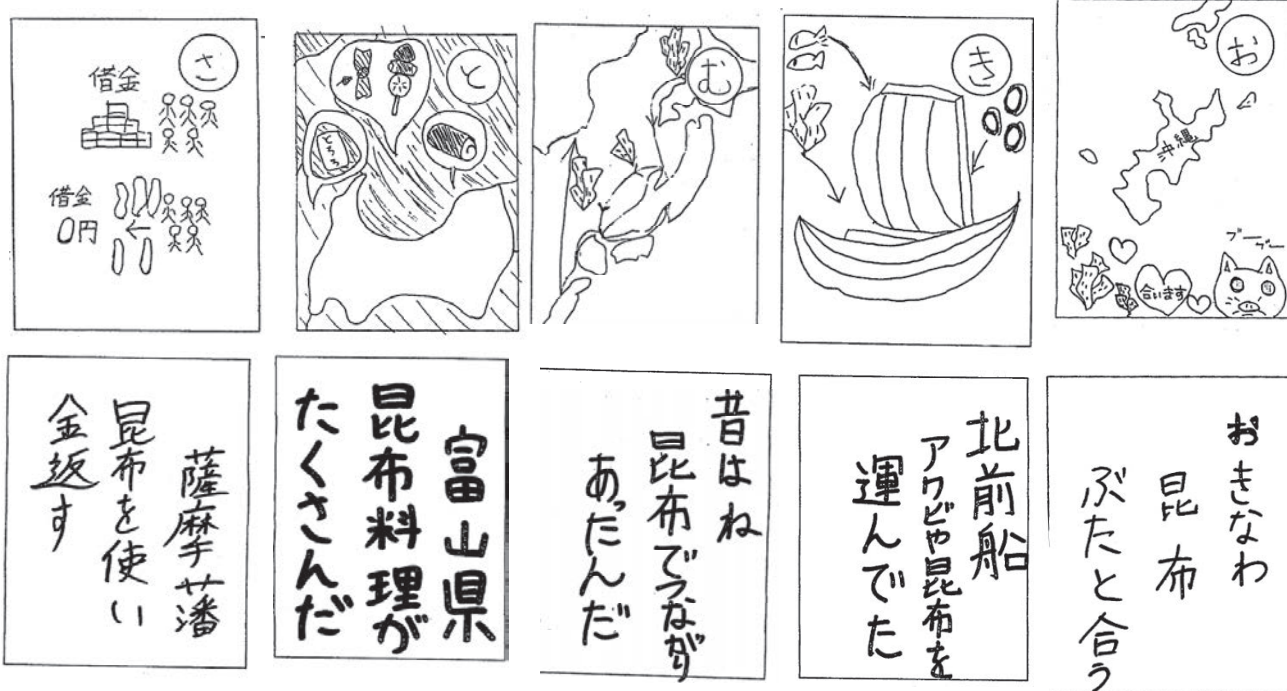
みなみは、北前船が昆布を運んだことを軸に中国から薬種を輸入したこと、売薬商人、琉球王国についてふれ、全体像をつかんでいることがわかる。さらに昆布が沖縄でどんな存在であったのかということ資料から述べ、この二つから沖縄の昆布消費量が多いと自分の考えを展開した。5年生のときの感想は沖縄が昆布貿易の中継地点であること、沖縄の人が昆布をお墓参りの行事などで使うように昆布を大切にしているという観点から書いていた。興味の観点でいえば変化はないが、6年生でのレポートと比べると、より自分の興味を深くしている。「歴博」の見学をしたことで北前船などについて理解したことも要因としてあげられる。

なぜ沖縄の昆布の消費量が多いのかは、密貿易ルートで沖縄を中間地点にしていたからだと思う。前にインターネットで調べたら沖縄には千葉や東京では聞いたことのない昆布取引所というところが今に残っているとあった。中国に輸出するとき少しは沖縄にとっておいたのではないかなと思う。そこで北海道に近い青森よりも沖縄が昆布を食べるようになったのだろう。昆布がとれない富山で昆布の消費が高いという資料によれば、昆布を越中に持ち帰り様々な昆布料理や昆布の文化が生まれたとあったから、沖縄も少しずつ昆布の文化が生まれてきたのだと思う。沖縄は薩摩が密貿易をしなかったら昆布を食べる習慣がなかったのかなと思った。(しょうた)

しょうたは最初なぜ昆布の学習をするのかわからなかったと感想で述べていたが、昆布がいろいろなことに関係があると気づいた。ゲストティーチャーから聞いた富山の昆布の文化についての話や、資料を活用して沖縄での昆布の文化が根付いた理由について自分の意見を述べている。いつもは引っ込み思案で、自分の意見を言ったり書いたりすることが苦手だったが、今回は自信を持って書くことができていた。

#### ④ かるたづくり

卒業も間近になり、クラスでおそろいの「かるた」をつくることにした。ここでも子どもたちの興味がそれぞれ違っていることがわかって興味深い。昆布ロードについて取り上げる子もいれば、沖縄や富山の昆布の文化について挙げる子どももいる。また北前船や薩摩藩のように昆布をテーマに学習しなければ注目することはなかったであろう事がたくさん出てきていた。かるたを作ったことで子ども自身の着眼点の違いや、興味の持ち方の違いを見てとることができた。



#### 5. 成果と課題

小学校の頃に歴博に行き、歴史の学習をしたことで、中学生になった今では「自分が調べ、感じたこと」を自信を持って言えるようになりました。その場にあるものを自分の目で見たりあるいは触ることによってそのものの存在感が感じられ、「自分は調べたんだ」という実感ができました。(はるな)

今回は昆布の研究のため行きましたが、時代の背景が見え、授業のとき「あっ、この時代ってこんなことが・・・」と学ぶ量が増えた気がします。(みなみ)

私は歴博に行く前は歴史というものは遠い世界を学んでいるような感覚でした。しかし、歴博に行くと寺子屋を体験したり、昔の道具や食べ物の資料を見たりしているうちに、現代と似ているところをたくさん発見しました。そのとき本当の歴史のつながりが見えてきたような気がしました。また、目で見たり触ったり、においをかいだりして、まるで自分が今、その時代にいるかのように歴史を身近に感じました。今中学生になり、歴史の授業はとて興味をわき疑問がたくさん出てきます。多分それは歴博でいろいろなことを学び、さらにもっと深く学びたいと思ったからです。(ほのか)



現在中学生になった子どもたちに歴博に見学に行ったことを振り返ってもらった。中学生になってさらに歴史に対する考えが深まっている。

「沖縄の人で昆布を食べない人はいるのかな」という何気ない子どもの疑問から、手紙を送ったり、ゲストティーチャーを呼ぶなどして大きく発展した学習だった。疑問や興味のあることを手紙にして多くの場所に送り、その回答から考えを深め、また新たな疑問を見つけることができた。それを2年間にわたって続けられたのは、多くの人々に支えられたからだ。歴博に行った子どもたちは自分たちが見てきたものをクラスで伝え、さまざまな疑問が出たことで広がり生まれた。資料の中から自分なりの根拠を見つけ、自分の考えを述べることの基礎ができたのではないか。昆布一つをとってもこれだけ奥深い歴史があったことに子どもたちが驚くとともに意識に変化が表れるのを見て取れた。今まで、歴史を学習することは織田信長や豊臣秀吉といった人物を覚えることだと思っていた子どもが、そうではない一面を感じ取り、体験し、考えたことがこの学習の一番の成果である。私自身知らないことばかりで、子どもとともに学んでいくことの楽しさを感じることができた。また私がこの学習で大切にしたいことの一つは、みんなが活躍できる学習にしたいということだった。学力が高い低いではなく、一人ひとりの興味が生きるようなものにしたいという思いがあった。それには誰でも発言できるような環境づくりが必要で、今回身近な食材である昆布を題材にしたことで学習中多くの子どもの発言が聞けた。

課題として博物館の見学の仕方があげられる。今回展示室での見学からこれまで学習してきたことの疑問を解決したり、新たな疑問を持ったりすることができたが、展示の説明などは受けなかった。声をかけながらも、子どもの見学を見守る形になったが、子どもたちが持った疑問を、その場で博物館の研究者に聞くことができると、より見学での収穫が大きいと考える。また、展示の説明をしてもらうことでも同じことが言える。

## 6. わたしの考える歴博活用案

6 学年	社会科・総合的な学習の時間	単元名	昆布ロードを追う	10 時間
------	---------------	-----	----------	-------

### (1) ねらい及び指導要領との関連

本単元は学習指導要領の内容(1)のオに相当する。昆布という「もの」から鎖国の中でも外国との交流があったことをつかむとともに、江戸時代の流通や人々の交流について理解することをねらいとする。また、資料を活用することや、博物館で見たもの、手紙等での研究者との交流を通して自分の考えを形成していくことで歴史に対する興味・関心を高める。教師が授業実践を行う中で、子どもたちと研究者との交流を組み込むことで、展示の意図や歴史における位置づけなど、専門家の意見を聞くことができ、子どもたちが資料を活用して調べ、自分の考えを形成していくうえでより広い視野で考え、表現していく大きな支えとなると考える。交流の方法としては子どもたちがもった疑問を手紙として送ったり、博物館で実際に質問をしたりすることが考えられる。

## (2) 活用する歴博資料

- ・第3展示室 「国際社会のなかの近世日本」のコーナー

4つの口を通じて近世日本の対外関係の広がりをつかむことをねらいとする。昆布や俵物といったものから当時の輸出入について具体的な物を見ることで理解を深める。

- ・第3展示室 「ひとつのもののがれ」のコーナー

北前船模型を中心に見学し、江戸時代の流通（航路や廻船組織）についてつかむ。

## (3) 単元計画 計 12 時間

過程	時間	○学習活動 ●学習内容	指導上の留意点
導入	1	○学習問題をたてる ●昆布の統計資料から学習問題を立て、沖縄で昆布の消費量が多い理由を資料から考え、話し合う。	・沖縄の体験などを交え、昆布がよく食べられていることから学習問題をたてられるよう支援する。
展開	2	○資料を読む ●昆布ロードについて知る。 ・琉球王国・北前船・売薬商人・薩摩藩	・資料を精選する。 ・疑問が多く出るよう声かけをする。
	1	○疑問を手紙に書く。 ●わかったこと、まだわからないことをはっきりさせる。 ・近世日本の対外関係(清・琉球)・北前船・薩摩藩の政策	・わかっていることを書かせることで現時点での子どもの認識をつかむ。 ・疑問点をわかりやすく書かせる。
	2	○歴博見学 ●わかったことや疑問に思うことをあげる。 ・近世日本の対外関係(清・琉球) ・江戸時代の輸出入について ・北前船の特徴(江戸時代の流通)	・今までにもった疑問についてわかることを探しながら、新たな疑問を見つけるよう促す。 ・研究者に質問をたくさんできるよう見学させる。
	2	○手紙の回答や歴博での見学でわかったことを話し合い、新たな疑問を手紙に書く。 ●自分の興味の観点をはっきりさせる。 ・昆布ロード・近世日本の対外関係(清・琉球)・北前船	・子どもの認識の変化をつかむ。 ・歴博見学でわかったことなどをもとに話し合わせる。 ・子どもの関心に合った資料を精選する。
	2	○資料からさらに疑問点を調べる ●手紙の回答や資料から疑問点について話し合う。	・新たな疑問について話し合いながら、多くの意見を取り上げていく。
	まとめ	2	○かるたづくり